

外国語教育に関するアンケート調査報告 —教官編—

小樽商科大学外国語教育研究会

(代表世話人) 高 井 收

大 塚 讓

副 島 美由紀

高 橋 純

匹 田 剛

裴 嶺

(代表世話人以外はアイウエオ音順)

1. 調査概要

この調査研究は、小樽商科大学における外国語教育の実態調査の一環として、本学教官が外国語教育についてどのような認識と評価と要望を持っているかを調査・研究し、その結果を今後の外国語教育の改善の基礎資料として活用しようとするものである。もとより学生の声に真摯に耳を傾けることも極めて重要であるが、同時に学生の輩出に対して責任を分かち合う教官相互間で外国語教育の理念や目標について常にコンセンサスを形成する努力を続けることも、それに劣らず重要である。私達は、すべての科目およびすべての科目間の関係の見直しを迫る「大綱化」の流れの中で、あえて後者の作業を時宜を得たものと判断し、長年の課題であった外国語教育についての学内コンセンサスの形成に、客観的データに基づいて一石を投ずることにした。しかし外国語教育についての学生の意識動向に関して関心をお持ちの向きは、近々本学の学生の一部をも対象として道内の複数の大学にまたがる英語教育に関する大掛かりな意識調査が公表の運びとなっており¹⁾、またその他にも信頼するに足るデータがすでに幾つかまとめられているので²⁾、応急の手掛かりとしてこれらを参照することをお薦めしたい。

調査対象は、教育義務の無い助手を除く本学の全教官とし、調査期間は平成5年5月10日から同24日までであった。調査方法について言えば、下に掲げた調査表からも分かるように、まず担当分野(専門・一般教育・外国語)を明記のうえ、多肢選択(複数回答可)・記述(「その他」として)併用方式に基づいて、I. 本学の外国語教育全般について、II. 英語教育について、III. 初習外国語教育について、それぞれ回答を求めた。ただし、[QI-7]のみは純然たる記述式で³⁾、本学の外国語教育全般に対する要望を3項目にわたって列挙することを求めている。ちなみに本調査のサンプル数は総計46、内訳は専門27、一般教育3、外国語13、不明3であった。

調査の舞台裏の説明を終えるに当たって、快く回答をお寄せ下さった本学の教官諸氏に心から感謝申し上げたい。また、今回海外出張のため執筆には加わらなかったものの、大島稔氏(英語)が出発までの間グループの中心的なメンバーとして調査にたずさわっていたことを付記しておく。

外国語教育に関するアンケート調査についてお願い

平成5年5月10日

先に行われました外国語教育研究会第6回例会にて、本学における外国語教育の目標を明確にするためにアンケート調査を実施することに致しました。その第1回目として学内の専任教員の方々に広く意見を求めたいと思います。よろしくご協力の程をお願い致します。集計の都合上、平成5年5月24日までに管理棟メールボックス隣の回収箱までお願い致します。

以下の回答にあたっては2つ以上選んでもかまいません。選んだ番号に○印をつけ、必要に応じて書き込んで下さい。

次のいずれかに○印をおつけください。 1. 専門担当 2. 一般教育担当
3. 外国語担当

I. 本学の外国語教育全般について

1. 次の4技能のうちどれに重点を置くべきだと思いますか。

聞く 話す 読む 書く わからない その他 ()
1 2 3 4 5

2. 授業やゼミで洋書を使っていますか。あるいは使おうと思っていますか。

使っている 使いたいと思っている 使っていない
(何語ですか:) (何語ですか:)

3. 現在洋書を使っていない場合の理由をお書き下さい。

必要ない 学生の語学力 わからない その他 ()
1 2 3

4. 担当する授業において外国語で講義をおこなっていますか。

おこなっている おこなわない おこなっていない
(何年次ですか:) (何語ですか:)
1 2 3

5. 学外の検定試験を本学での語学力の評価に利用すべきですか。

国内の検定試験 海外の検定試験 必要なし わからない
1 2 3 4

(その目的は何ですか:)

6. 卒業生の中で外国語を使う必要に迫られている人をご存知ですか。

知っている (何語ですか:) 知らない
(どんな職種内容ですか:)

7. 本学の外国語教育に何を求めますか、お書き下さい。

1.
2.
3.

II. 英語についてお答え下さい。

1. 1年目の英語の目標として最も適当と思われる項目はどれですか。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

2. 2年目の英語の目標として最も適当と思われる項目はどれですか。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

3. 3年目の英語の目標として最も適当と思われる項目はどれですか。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

4. 学生に受けさせたいと思う英語の授業についてお答えください。

リスニング 日常会話 討論 読解 作文 文法 わからない
1 2 3 4 5 6 7

(その他:)

- 1 -

- 2 -

5. 3年間の学習を終えた学生に対しどの程度の読む力を期待しますか。

新聞 TIME誌 エッセイ 専門書/論文 文学作品 わからない
1 2 3 4 5 6

(その他:)

6. 3年間の学習を終えた学生に対しどの程度の書く力を期待しますか。

手紙文 エッセイ レポート 論文 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

7. 3年間の学習を終えた学生に対しどの程度の聞き・話す力を期待しますか。

日常会話 ニュースを聞く 講義を聞く 討論 スピーチ わからない
1 2 3 4 5 6

(その他:)

8. 西大生の英語力で最も欠けていると思われるものをお書きください。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 文法 語彙力 わからない
1 2 3 4 5 6 7

(その他:)

9. 担当の講義またはゼミを英語でおこなっていますか。

現在使用 試したい 必要無し わからない その他 ()
1 2 3 4

III. 初習外国語(ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語)についてお答え下さい。

1. 1年目の教育目標として最も適当と思われる項目はどれですか。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

2. 2年目の教育目標として最も適当と思われる項目はどれですか。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

3. 3年目の教育目標として最も適当と思われる項目はどれですか。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

4. 学生に受けさせたいと思う外国語の授業についてお答えください。

リスニング 日常会話 討論 読解 作文 文法 わからない
1 2 3 4 5 6 7

(その他:)

5. 3年間の学習を終えた学生に対しどの程度の読む力を期待しますか。

新聞 時事評論誌 エッセイ 専門書/論文 文学作品 わからない
1 2 3 4 5 6

(その他:)

6. 3年間の学習を終えた学生に対しどの程度の書く力を期待しますか。

手紙文 エッセイ レポート 論文 わからない
1 2 3 4 5

(その他:)

7. 3年間の学習を終えた学生に対しどの程度の聞き・話す力を期待しますか。

日常会話 ニュースを聞く 講義を聞く 討論 スピーチ わからない
1 2 3 4 5 6

(その他:)

8. 西大生の初習外国語の能力で最も欠けていると思われるものはどれですか。

聞く能力 話す能力 読む能力 書く能力 文法 語彙力 わからない
1 2 3 4 5 6 7

(その他:)

9. 担当の講義またはゼミで初習外国語の文献を使っていますか。

現在使用 試したい 必要無し わからない その他 ()
(何語ですか:)
1 2 3 4

- 3 -

- 4 -

2. 外国語教育全般について (QI-1～7)

2.1. QI-1～6 について

まず本学の外国語教育全般で中心に置かれるべき技能について尋ねた。技能としての選択肢は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つであるが、「聞く」「話す」という音声言語への回答が合わせて約58%と、その他の文字言語への期待に対して優位を占めていることがわかる(図1参照)。後述の、英語と初習外国語に関する結果(図8～10, 図17～19)も参照されたし。中では「話す」への回答が最も多く、「書く」への期待が低い訳だが、他と比べて突出しているとは言えず、やはり語学力というものが総合的に捉えられていると読むべきではなかろうか。

授業で洋書を使っているかどうかについて、まず専門、外国語といった担当や、英語、初習外国語の別を問わず聞いてみた。初習外国語に限った場合(図25)と比較して頂きたい。使っているという回答(約51%, 図2参照)を見ると、外国語別の内訳は、23件中、英語21, 独語, 仏語各1となっている。使いたい言語については、6件中、英語が4(あとは不明)であった。「使っている」「使いたい」と合わせて約65%であるから、洋書が授業に使われ得る可能性は高いと言えさるだろう。

現在授業に洋書を使っていない理由であるが、学生の語学力が不十分であるという理由が大半を占めて55%となっている(図3参照)。検討中という回答もあることから、学生の能力が充分であれば、洋書を使いたいという希望は多いということが言えるだろう。が、その他の理由の説明として、「問題関心の不足」をあげる声もあった。学生の語学能力を高める他に、彼らの「問題関心」を授業の展開によっていかに引き出すかも、合わせて考慮されるべきかもしれない。

外国語によって授業がおこなわれているかという質問であるが(図4参照)、これも外国語全体についての質問なので、英語に関する項目(図16参照)との比較が必要。ここでは外国語によ

図1. どれに重点をおくべきか (QI-1)

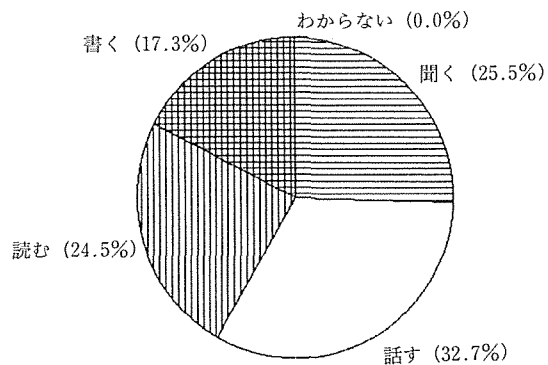


図2. 授業やゼミで洋書を使っているか (QI-2)

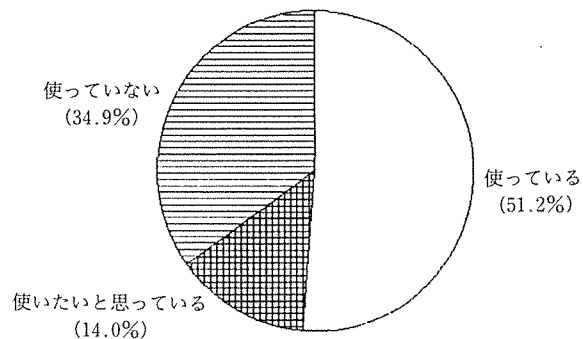


図3. 現在洋書を使っていない場合の理由 (QI-3)

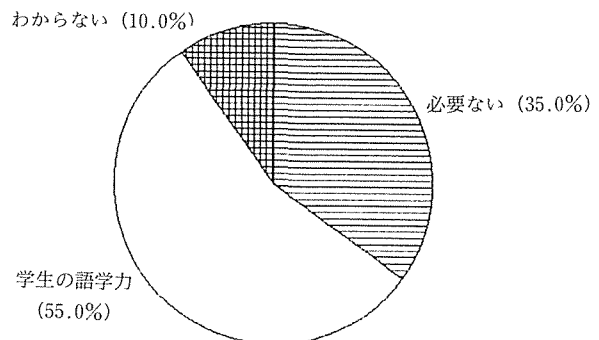
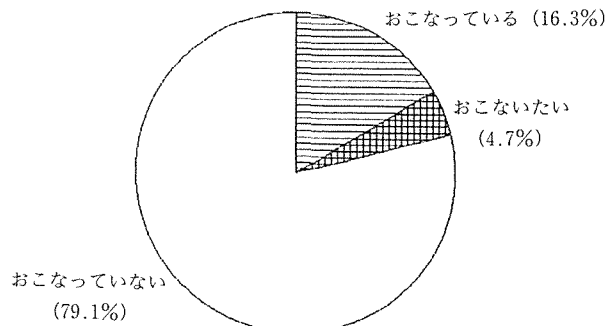


図4. 外国語で講義を行っているか (QI-4)



る講義を「おこないたい」という声は約5%であるが、英語に限って質問したところでは、「したい」という希望が約11%あるのに注意したい。使われている言語は、8件中、英語が6、独語と露語がそれぞれ1となっている。

学外の検定試験を、本学での語学力の評価に利用すべきかという問いには、英検、独検、仏検といった国内の検定試験を利用すべきという声が25%あるのに対し、TOEFLやTOEICといった海外の検定試験をあげる声が約29%であった。利用すべきという意見は合わせて約54%(図5参照)。その目的に関する回答は〔①：評価をより一般的な基準に合わせて明確化すべし。②：留学その他の現実的目標に対処できるよう。③：学生に刺激や目標を与えるため。〕という3タイプの意見にまとめることができる。短期、長期の海外語学研修が増えつつある現状を考慮すれば、このあたりはさし迫った検討課題と言えよう。

卒業生が使う必要に迫られている外国語は(図6参照)、19件中、英語が16、スペイン語、ポルトガル語、独語が各1となっている。またその職種は、証券会社での取引、銀行や商社の海外勤務、教師、スチュワーデス等である。但し、ここでの回答は、外国語を使っている卒業生を教官が知っているかどうかにかかっている訳であるから、実際に外国語を使っている卒業生の割合は厳密には別に求められなければならないだろう。

2.2. QI-7 (記述式回答) について

次に、記述式で本学の外国語教育全体への要望を各々3点まで挙げてもらったところ、全サンプル(46)中、74%(34)の回答が得られた。大部分の回答が2点以上の要望を挙げている。

ところで、調査表で順位付けを求めているわけではないが、要望の間に優先順位がある場合も考慮して、順位毎の分布状況にも相応の注意を払ってみた。ちなみに、順位毎の要望件数は、第一位が34、第一位と第二位の合計が59、第一位から第三位までの総件数は71であった。

まず要望の傾向別に大まかに分類してみると、①実用的能力：40件(約56%)、②専門文献の読解力：7件(約10%)、③異文化理解⁴⁾：7件(約10%)、④文法理解：2件(約3%)、⑤カリキュラム全般に関連するもの⁵⁾：9件(約13%)、⑥その他(若干数の「教養志向」タイプを含む)⁶⁾6件(約9%)となる(図7参照)。以下、この分布に関連して2、3の特筆すべき事柄を指摘し

図5. 学外の検定試験を利用すべきか (QI-5)

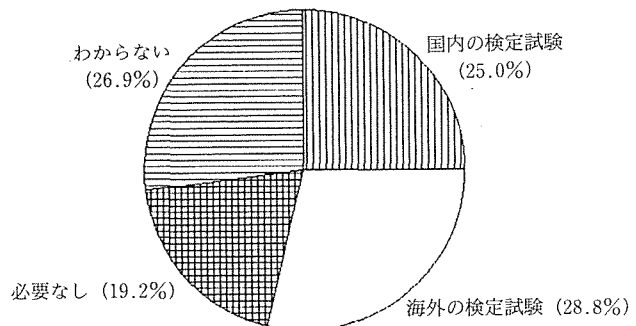


図6. 外国語の必要に迫られている卒業生 (QI-6)

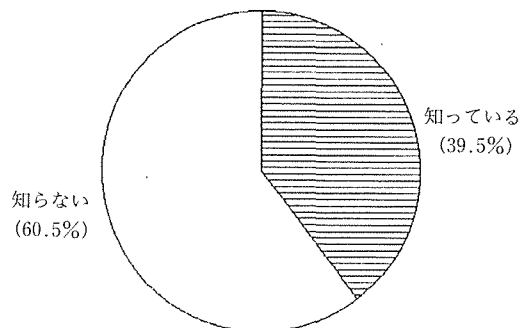
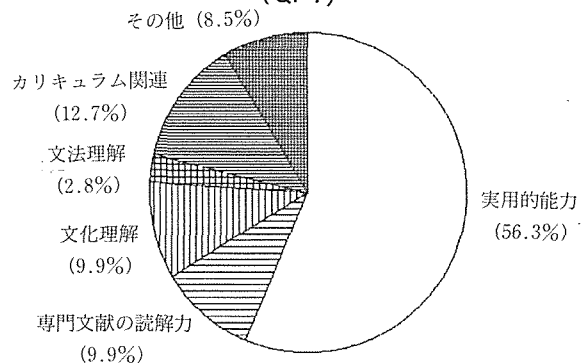


図7. 外国語教育への要望 (QI-7)



ておきたい。

一見して明らかなように、過半数が、本学で習得すべき外国語能力として①の「実用的能力」を挙げている。ここには時代・社会の要請、現代世界における言語使用の位相がこの上なく鮮明に現れていると思われる。また、②の「専門文献の読解力」養成への要望が意外なほど少なかったことも、それに劣らず注目される。後に述べるように、この傾向は、単純な退潮と見るよりも、むしろ時代の趨勢を反映して、読解力が総合的言語能力のコンテキストにおいて捉えられ始めている明らかな兆候と解釈すべきであろう。

まず「実用的能力」について少し立ち入ると、順位が上がるにつれてそれを求める要望の割合も高まることが分かる。全要望（71件）中では40件（約56%）なのが、第一位・第二位の要望の合計（59）中では38件（約64%）、さらに第一位（34）中では23件（約68%）という高い数値を示しているからである。さてそれでは、ここで「実用的能力」として一括した傾向は具体的にはどのような「能力」として理解されているのであろうか。この傾向の要望全40件の内、広義での「コミュニケーション能力」を挙げたものがもっとも多く、27件（約68%）[「コミュニケーションできる国際人」「国際ビジネス英語」「聞き・話し・読み・書く能力」「大学生にふさわしい会話力」等表現は様々]にも上っている。その他個別的技能に言及したもののうちでは、「実践的読解力」の養成を期待するもの6件（約15%）[「速読力」や「パラフレイズ能力」を挙げるもの、「新聞・雑誌」や「評論紙」など教材について要望するもの等々]、また何らかの形で「聞く」能力の養成を求めたもの5件（約13%）の数値の高さが目につく。ここで特に注目されるのは、「話す能力」が単独で現れているのは2件のみで、その他はすべて他の技能や他の見識（「異文化理解」等）の養成も併せて求められていることである。この傾向が物語っているのは、「実用的能力」を一段低いものと見なす日本の大学に根強い「教養主義的傾向」がかなり後退しつつあること、そして「コミュニケーション能力」の養成が多様な技能・知識・理解力の総合を通して初めて可能となる複雑・高度なプロセスであることが広く理解されつつあること、であろう。

次に「専門文献の読解力」養成を求める声の意外な少なさ（7件、約10%）は、一体何を示唆しているのであろうか。いわゆる専門教官たちの外国語教育への期待感の薄さを示しているのであろうか。そうではあるまい。彼らがいわゆる原書講読を通しての伝統的な読解力しか期待していないと思込んでいる限り、彼らの声は聞こえて来ないだろう。そもそも「読む」ことに彼らが何を期待しているかに耳を傾ければ、色々なことが聞こえて来る。まず第一に、「専門文献の読解力」の養成を第一位に据えているのは全7ケースの内2ケースのみで、しかもこれら7ケースはすべて、単独では現れず必ず「聞き話す力」や「異文化理解」の養成などへの期待を伴って現れている。つまりここでは異文化コミュニケーションのための総合的言語能力・見識の中に「読解力」が位置付けられているらしいことが分かる。第二に、「読む」能力の養成への期待そのものは随所で表明されており、いわゆる4技能の総合力への期待においてその一角を占める場合はもちろんのこととして、それは「速読力」や「パラフレイズ力」といった実践的読解力への言及という形で現れたり、また新聞・雑誌や評論紙を教材とすべし、文学的教材が多すぎる、といった学習素材への提案というかたちで現れたりしている。以上を踏まえて言えることは、いわゆる専門教官を含む教官全般が、「読解力」についても実用的な総合的言語能力という枠組の中に位置付けつつあり、学生にも「逐語訳主義」を越えた言語能力を期待している人が意外に多い可能性がある、ということである。

尚、④の「その他」にはどの範疇にも収まりにくい要望を一括したが、どちらかというとも根本

的な物の見方にかかわる「教養志向」タイプのものが主で、その意味では「異文化理解」の範疇とややつながっているかもしれない。

3. 英語について (QII-1~9)

英語の授業について1年目の最も適当な目標について聞いたところ、「聞く能力」と「話す能力」を合わせると全回答数の約69%に達し、音声言語能力の重要性が示されている。また「聞く能力」と「話す能力」についてはほぼ同数の回答があり、同じ程度に重要性が感じられていることが分かる(図8参照)。このアンケート用紙には「その他」の項が記述式になっているが、「会話を中心とした授業」という意見と、「4技能全てを含んだ総合力の重視」という意見がそれぞれ1件ずつあった。

2年目の英語の目標として最も適当と思われる項目について聞いたところ、「話す能力」に対する回答が1番多く全体の約33%であった。次に、1年目の目標と異なるところは「読む能力」に対する回答が約28%あり、専門に入ってから論文などを読む準備態勢を整えることへの期待がうかがえる(図9参照)。「その他」の項目においては、「専門書を読む」など専門科目への準備に言及するものが2件あった。また、4技能全てを含んだ「総合力の重視」という意見も1件あった。

3年目の英語の目標として最も適当と思われる項目について聞いたところ、「読む」「書く」能力が全体の約54%を占め1, 2年次に比べると、音声言語と文字言語への重点の置き方が逆転していることが分かる。なかでも特に「読む能力」は全体の約29%に達し、最も重要と考えられている(図10参照)。「その他」の項を見ると、「3年次の英語は不要」という意見が2件あり、「総合力」という意見が2件、「専門書の読解」というのが1件あった。

学年を経るに従って、期待される目標は移動するというより拡大している。それぞれの能力は各々別個の独立したものではなく、本質的には一体化した総合的能力の多様な側面の一つであるのだから、目標は年ごとに変転するのではなく、積み重ねられ多様性を増してゆくのは当然である。その際、最初に「聞く」「話す」能力の獲得が期待されているところに特徴がある。ここには、大学入試まで学生が学習してきた文法中心の従来の英語教育への反省と批判が込められているといえよう。

図8. 1年目の英語の目標 (QII-1)

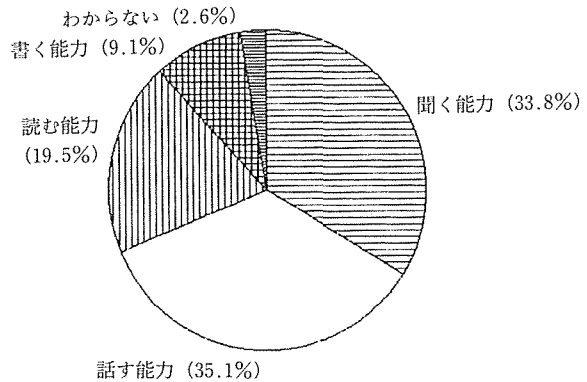


図9. 2年目の英語の目標 (QII-2)

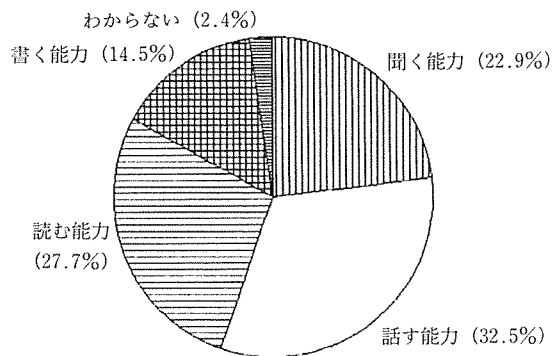
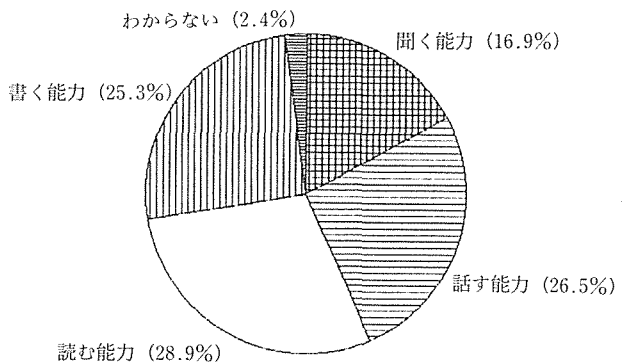


図10. 3年目の英語の目標 (QII-3)



次に、学生に受けさせたいと思う英語の授業について聞いたところ、「日常会話」が全体の約23%、「リスニング」と「討論」がそれぞれ約21%、「講読」が約20%、「作文」が約11%、そして最後に「文法」の約4%という結果になった（図11参照）。国際化と共に、これからの英語教育は「聞いて、話すこと」ができるようになる授業が求められているのが分かる。さらに、「リスニング」や「日常会話」はスポーツで言えば基礎体力や基本動作と言うべきもので、これを抜きにしては他の能力も発展させられない。「討論」はそれらの能力の発展段階として当然期待されるものだろう。「講読」は「その他」の項目で出された「専門書を読む」という意見（1件）に代表されるように、専門のゼミなどでの原書講読における有効性への期待も含まれているだろう。

そして、3年間の英語の授業を通じてどの程度の読む力を期待するか聞いたところ「専門書・論文」が読めるようになることが全体の約32%あり、次に、「新聞」が約31%、「TIME誌」が約19%、「エッセイ」が約12%、そして、「文学作品」が約6%という順になっている（図12参照）。読む能力への期待として「新聞」、「TIME誌」で約50%という回答には、何よりも時事的な話題や情報を即時に吸収できる力への期待が反映していると考えられる。「専門書・論文」を読む能力への期待の高さ（約32%）は前述のように大学教育の中ではごく自然なものだろう。また文体に関しても、文学作品よりはむしろ新聞やエッセイ・タイプ、あるいは論文調のものを読めるようになることが期待されている。なお、「その他」の項で「TIME誌よりも程度の高いものを読む」という意見が1件あった。

3年間でどの程度の書く力を期待するかという問いに対して、「手紙文」が約41%、「レポート」が約35%と多く、「論文」は約9%と低く、英語で論文を書くところまでは期待していないことが分かる（図13参照）。

「聞き・話す力」については、「日常会話」が全体の30%を占め一番期待される能力で、次に衛星放送などの「ニュースを聞く」能力が20%、「講義を聞く」能力が約19%、「討論」が約18%あった（図14参照）。学内的に見れば、これは外国人による特別講義などに対する必要性から生じたものであらうと思われる。さらに、一般的に見れば、いわば現場性の要求からきていると思われる。つまり、その場で聞いて理解し、その場で必要に応じて反応できる能力が求められていると

図11. 学生に受けさせたいと思う英語の授業 (QII-4)

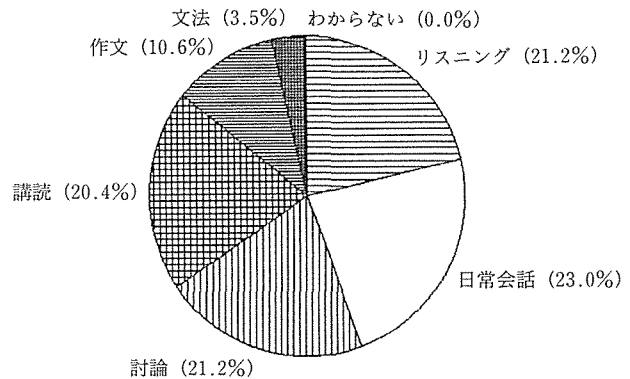


図12. 3年間で期待する読む力 (QII-5)

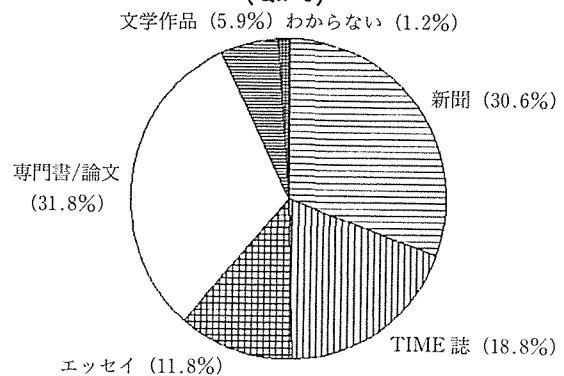
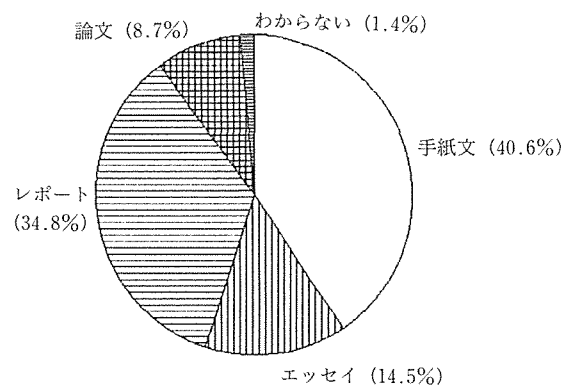


図13. 3年間で期待する書く力 (QII-6)



言えよう。

次に、本学、学生の英語力で最も欠けていると思われるものを問うと、一年目の英語の目標について（図8参照）の回答と対応し、「聞き・話す」能力の欠如が全体の約53%に達しており、やはり音声言語教育の充実が強く求められていることが分かる。「読む能力」に対しては約13%の回答数があり、「書く能力」と合わせると約28%となり、必ずしも十分な指導がおこなわれているとは考えられていないことが分かる（図15参照）。「その他」の項目で「習熟度別のクラス編成にした方がよい」という意見が2件あった。なお、この質問で「わからない」という回答が多い（約12%）のは、回答者の中には学生の英語力を直に知る機会のない教官もいるからであると推測される。

最後に、担当の講義またはゼミを英語で行っているかどうかを聞いたところ、約66%は「必要無し」と答えている。しかし、約16%は「現在おこなっている」との回答を得、また、「将来試したい」と答えた数（約11%）と合わせると約27%になる（図16参照）。この数字は、本学のように外国語学部のような英語の専門学部を持たない大学としては、決して少ない数とは言えない。また、「その他」の項で「過去にはおこなっていたが今はおこなっていない」という回答が1件あった。

以上英語についてアンケート調査の結果を見てきたが、本学の教官の認識としては、学生に期待される英語力とは、「読む」、「聞く」ことを通して時事的な情報を即時に吸収し、それに対応する自己表現を英語で行うことができる能力であると考えられる。そして、そのような現場に即応できる生きた英語力を踏まえて、専門科目の授業で英語で書かれたテキストや論文が読めるという能力が期待されている。そこで、本学の英語のカリキュラムのあり方としては、1年次には特にリスニングなどによって音声言語能力の基礎を築き、2年次、さらに3年次にはその応用として、聞いたり、読んだりした情報を基に討論・発表が出来る英語力の養成を目標とすべきであろう。

4. 初習外国語について（QIII-1～9）

初習外国語について、1年目から3年目までそれぞれ最適と思われる目標について聞いたところ、「読む能力」に対する期待が最も多く、読解力に対する要求が強いことがわかる。1年目は約

図14. 3年間で期待する聞き・話す力（QII-7）

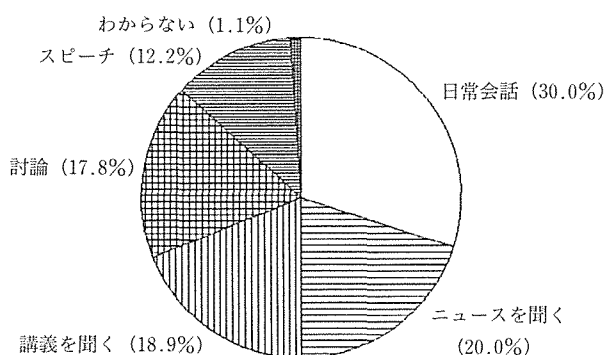


図15. 最も欠けていると思われる英語力（QII-8）

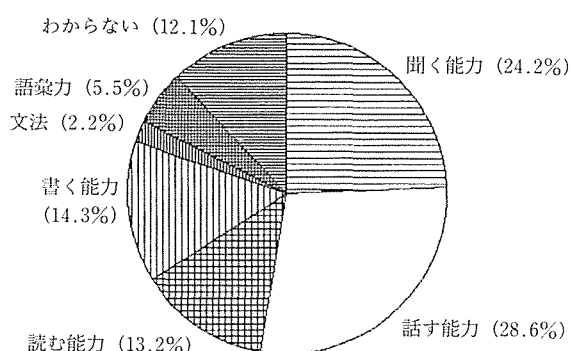
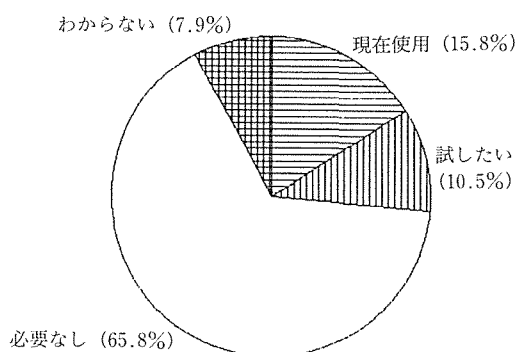


図16. 講義・ゼミを英語で行っているか（QII-9）



42%に達し、2年目になると約34%、3年目で約32%と次第に低くなる。

1年目から3年目まで通じて、「話す」あるいは「聞く」という音声言語の習得を目標とするものも多い。「聞く能力」は1年で約24%で、2年も3年も約23%で、ほぼ変わらない。「話す能力」は1年約24%、2年30%、3年約27%となり、2年目での期待が一番高い。「書く能力」に対する期待は他の3技能に比べると少ないが、学年が高くなるにしたがって、その期待が高まっている(約8%→11%→18%)ことがわかる。ちなみに、「話す」と「聞く」を合わせた音声言語能力全体と「読む」と「書く」を合わせた文字言語能力全体をそれぞれの学年で見ると、1年目で音声言語が約48%で文字言語が約50%、2年目で音声言語が約53%で文字言語が約45%、そして3年目では音声言語・文字言語ともに約50%となっており、いずれの学年でも音声言語教育と文字言語教育に対する期待が拮抗している。このことは、個別の技能に対する期待が学年によって異なることはあっても、全体としては音声言語教育と文字言語教育がバランスがとれて行われるべきだとの期待があらわれているものと考えられよう(図17,18,19参照)。「その他」の欄には1年目で「文法」、2年目で「全て」というのがそれぞれ1件あり、3年目では「全て」の他に、「不要」という意見も1件ずつある。

次の、学生に受けさせたいと思う外国語の授業については全員から回答を得た。「日常会話」に対する期待が約30%で、最も多い。「リスニング」に対する要求も強く、約23%である。音声言語に対する要求がここでも強いと言えよう。しかし、同じ音声言語でも、「討論」に対する要求は少なく、約7%である。このことから比較的「基礎的な」音声言語の習得に対する要求が強いことがわかる。音声言語以外ではここでも読解力に対する要求が強く見られ、約26%に達し、読解力の必要性が重要視されていることがわかる。ちなみに、「討論」、「作文」、「文法」に対する希望は、全て約7%と同水準の低さである(図20参照)。「その他」の欄には「事情、文学、言語」という回答が1件ある。

3年間の初習外国語の学習を通じてどの程度の読む力を期待するかについて聞いたところ、「文学作品」に対する期待は約4%で、最も低い。その他では「新聞」が約31%、時事評論誌が約22%を占め、期待が最も強く見られる。「専門書・論文」がそれに続き、約21%である。社会科学の大

図17. 1年目の教育目標
(QIII-1)

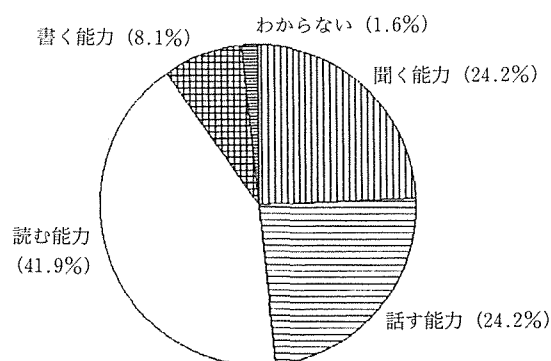


図18. 2年目の教育目標
(QIII-2)

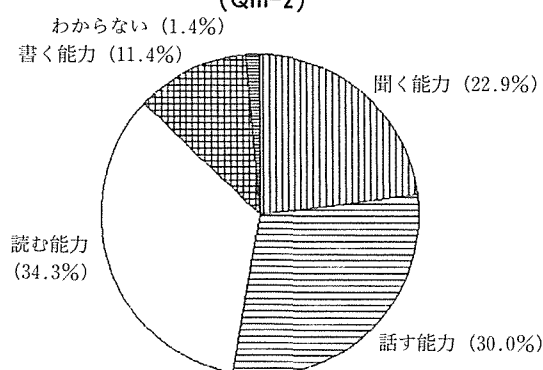
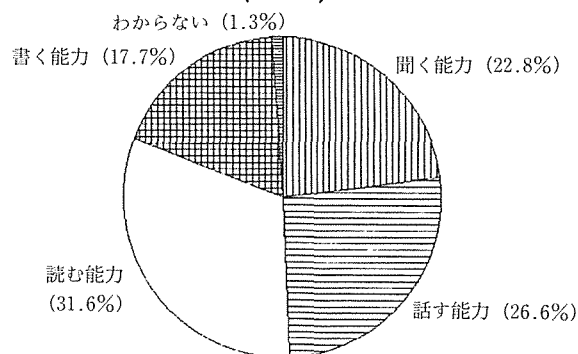


図19. 3年目の教育目標
(QIII-3)



学としての専門に役立つ能力が期待されていると思われる。「わからない」は約7%である(図21参照)。「その他」の欄に「易しいもの」と回答したものが1件あった。

3年間でどの程度の書く力を期待するかという問いに対して、「手紙文」が約56%に達し、圧倒的多数を占めている。「レポート」が約23%と続く。また、「レポート」への比較的高い期待に対して、「論文」は約5%と低い。初習外国語では論文を書くほどの高度な能力は期待しないが、できれば専門に役立てられればということであろうか(図22参照)。「その他」の欄には「簡単な近況報告」と書いたものが1件ある。

「聞き・話す力」については、「日常会話」が全体の53%を占め、圧倒的に多い。それに対して、「ニュースを聞く」が約17%、「講義を聞く」が約12%、「討論」と「スピーチ」がそれぞれ約6%となっている。音声言語に関しては専門に役立てたいという意識が少ないことがわかる(図23参照)。「その他」の欄には「簡単なレベル」、「期待できない」などの回答が1件ずつある。

本学の学生の初習外国語の能力で最も欠けていると思われるものを問うと、「話す能力」が約28%、「聞く能力」が約22%であり、音声言語に対する能力の不足が最も多く指摘されている。図17～19で読解能力の開発がいずれも強く期待されているのに対して、ここで「読む能力」が不足していると回答したのは約12%で、意外に少ない。このことから本学学生の音声言語習得の程度は低いということが見て取れよう(図24参照)。また、「その他」の欄には「全て」という回答が2件ある他、「辞書の引き方」、「意欲」、「やる気、自発性、自覚」などの回答が1件ずつある。

最後に担当の講義またはゼミで初習外国語の文献を使っているかどうかを聞いたところ、「現在使用」と答えたのはドイツ語とフランス語と回答した各2名であったが、いずれも外国語担当の教官からの回答であった。残念ながら外国

図20. 受けさせたい外国語の授業
(QIII-4)

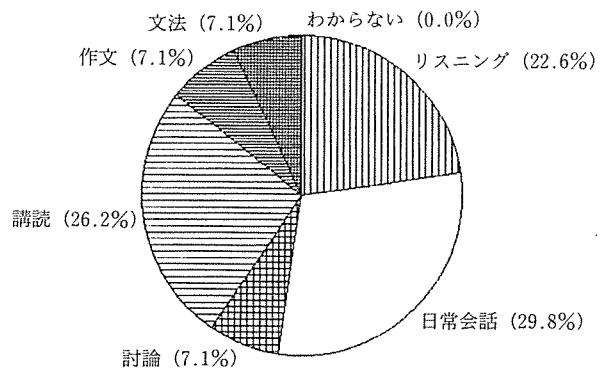


図21. 3年間で期待する読む力
(QIII-5)

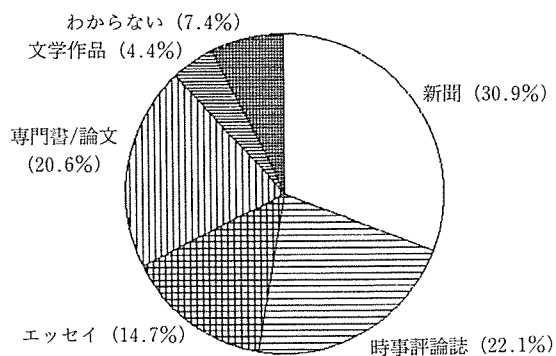


図22. 3年間で期待する書く力
(QIII-6)

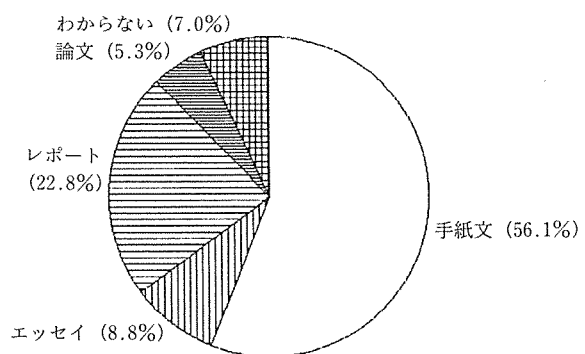


図23. 3年間で期待する聞き・話す力
(QIII-7)

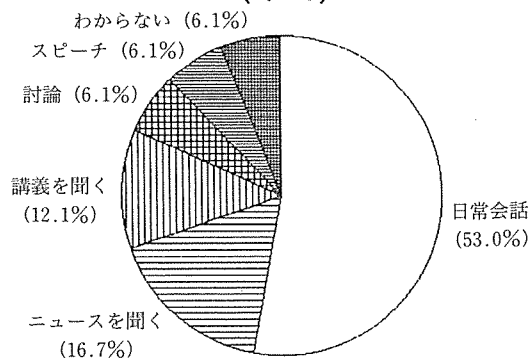


図24. 最も欠けている初習外国語の能力
(QIII-8)

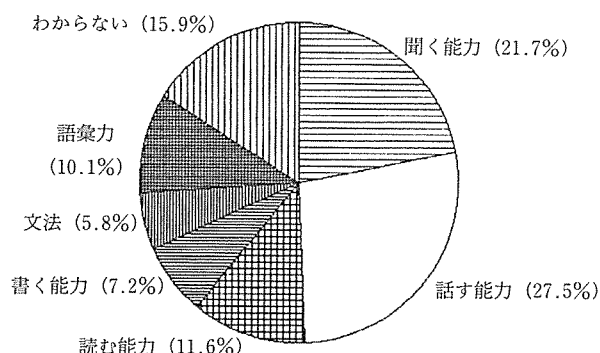
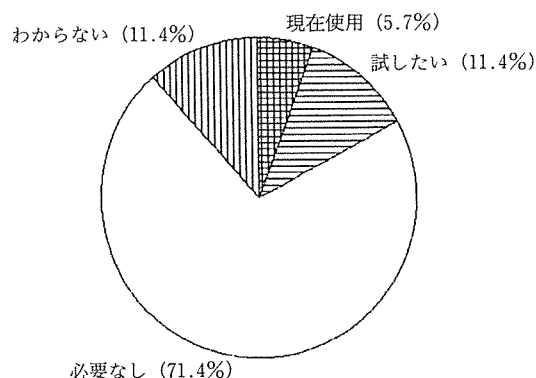


図25. 講義・ゼミでの初習外国語文献の使用
(QIII-9)



語の授業以外では初習外国語の文献を用いていることは現在無いようである。しかしながら、「試したい」と回答した4名の教官のうち、3名までが専門の教官であることは注目すべきであろう(図25参照)。

以上、初習外国語についての調査結果を見てきたが、それに基づいて次のように推論できるかもしれない。本学教官は、学生に求められる初習外国語の能力とは、時事的な文章を読んでその情報内容を理解し、段階に応じた表現でそれについての意見を表明し得ることである、と考えているようだ。また、それとほぼ等しいウェイトで、コミュニケーション、情報収集の手段として役に立ち、日常的な仕事ができるような実用的な音声言語の能力も学生に期待していると考えられよう。

このアンケートの結果を見る限り、本学の初習外国語のカリキュラムのあり方としては、個別の技能に関しては学年ごとに重点の置き方を変化させながらも、音声言語と文字言語のどちらにも片寄ることのないバランスのとれた教育を行うことをめざすべきであろう。

5. まとめと展望

5.1. 大学教師と外国語教育

大学教師と大学の外国語教育との間には浅からぬ因縁がある。彼らは第一に大学の卒業生としての観点から外国語教育を観察しているだろう。それも、卒業後特に外国語と深いかかわりを持つ職業に就いている卒業生としての観点から。外国の大学で長期にわたって研鑽を積んだ者も少なくない。この種の卒業生が大学の外国語教育に独自の見識を持ち、またこれに対する注文もかなり手厳しいことは想像に難くない。しかし、ある調査⁷⁾によると、注文の手厳しさは今や大学の卒業生全般に広まっている。

すなわち、大学卒業生たちが大学時代にあればよかった外国語の授業として挙げているのは、第一位が「話す力をつける授業」(約75%)、第二位が「聞く力をつける授業」(約68%)であり、今後のありうべき外国語教育の目標として挙げているのは、中学・高校の段階では「コミュニケーションの基礎力養成」(約89%)であり、大学ではさらに本格的な「コミュニケーション能力」の養成(約78%)であるという(ちなみに第二位が「国際人の養成」約33%)。本学の教官が今回の調査で示したきわめて高い実用的能力への期待には、どこかこの統計と二重写しになるものが感じられる。

第二に大学教師は自身、部分的に語学教師であり、私達と同業者である。授業やゼミで洋書を用いていた、用いたいと思っている者が約65%もあり(図2)、また講義やゼミを英語で行って

いたり、将来行いたいと思っている者が約 27%にも上る(図 16)からである。このように、彼らは結果的には私達と共同で外国語教育に当たっているわけであるから、受益者たる個々の学生におけるよりよい外国語習得を願うならば、もっと組織的・計画的に協力し合うべきであろう。

第三に大学教師は研究者として外国語の本格的な学習者である。この意味でも彼らは私達の盟友であり、共通の基盤を持っているのである。

私達がこの度その意見に耳を傾けたのは、つまりこのような人々であった。私達の側からするフィードバックは、これまで展開してきた分析がすでにその一部を成しているが、ここではさらにそれに付け加えて、提出された様々な意見を 2, 3 の論点に集約しておきたい。

5.2. 期待される実用的能力の養成

グラフ全体を改めて通観してみると、そこにいわゆる 4 技能(聞く・話す・読む・書く)のバランス、総合的な外国語能力への期待をほぼ読み取ることができる。この期待は、英語同様にそれ以外の外国語に対しても向けられている⁸⁾(図 1, 10, 11, 19 等)。このことは、4 能力を音声言語能力(聞く・話す)と文字言語能力(読む・書く)とに分けて両者のバランスを調べてみた場合、英語およびそれ以外の外国語ともに、一部の例外⁹⁾を除いてそれがかなりの程度安定している(図 9, 10, 17~24)ことによっても裏付けられていると言えよう。

この 4 技能のバランスへの期待、音声言語能力と文字言語能力のバランスへの期待は、ひとつには直接・間接の意志疎通の道具として言語を捉える認識を示していようし、ふたつには現実的要請として、実用的能力の養成への期待を示していよう。ここで実用的能力とはとりわけ直接的コミュニケーション能力のことであって、このことは例えば、最も欠けている外国語能力として英語、初習外国語ともに聞く能力と話す能力で 50%前後を占めているのに対して、逆に間接的コミュニケーション能力である読む能力と書く能力の合計は、英語で約 28%、初習外国語で約 19%とはるかに少ないこと(図 15 および図 24)、また学生に受けさせたい授業としてリスニング、日常会話、討論といった直接的コミュニケーションの育成に関連するものの合計が、英語で約 65%、初習外国語で約 60%と半数をかなり越える数値を示しているのに対して、講読と作文の合計は英語で約 31%、初習外国語で約 33%とほぼ前者の半分に過ぎないこと(図 11 および図 20)等が裏書きしていよう。

このような直接的コミュニケーション能力を重視する傾向と表裏を成すのが、「読解力」のあり方の地核変動である。例えば、図 12 と図 21 は、この点に対して実用的な総合的言語能力への期待という観点から新たな照明を当てている。ここでは明らかに「読解力」のあり方についての抜本的変更、すなわち学習素材と養成されるべき言語能力双方の変更が求められていると言えよう。具体的に言えば新聞・時事評論紙・エッセイといった、速読による情報収集にマッチした素材が英語で約 67%、初習外国語で約 61%と極めて高い支持を受けており、逆に長らく語学教材の王座を占めてきた文学作品は英語で約 6%、初習外国語で約 4%と大きく後退している。しかしこうした高級テキストから時事的素材への変更の要望は、思い返してみると随分以前から耳にしてきたもので、これまでほとんど顧みられて来なかったこと自体むしろ異常とも言えるかもしれない。周知の通り、外国語の学習と当該社会への同時代的関心とを結び付けることは、学習動機を刺激し学習効果を高める重要なアプローチとして、すでに世界的に外国語教育のイロハに数えられるであろう。このようなアプローチは、とりわけ本学のような性質の大学の場合には、専門教育との有機的連関を重視する意味で、むしろ外国語教育の根幹を成すべきであろう。ところで、この学

習素材の変更への要望は、外国語能力の育成の面から見ると、逐語訳的にテキストを丹念に読んで行く「翻訳的読解力」から大意の把握を主眼とする「速読的読解力」への力点の移行を伴っているであろう。後者の読解力は、即時性を目指す点で「聞く」能力や「話す」能力といった他の能力とも連携するものであり、その意味で総合的言語能力の形成に促し、また直接的コミュニケーションに対して開かれたものと言えよう。これに対して前者の「翻訳的読解力」は、我国の外国語教育においてほとんど唯一絶対の到達目標を成して来た言語能力であるが、もともとコミュニケーションを予定せずひたすら情報の一方的受容を志向しているので他の言語能力から孤立しており、むしろもっぱら母語の文字言語能力の錬磨を志向している感が深い。いずれにしろ、遅まきながら、総合的・実用的言語能力の育成という枠組みの中で読解力の育成も行われるべきことが、これほどまでに強く求められていることをたじろがず直視する必要があるだろう。高級テキストによる「翻訳的読解力」を希求する「教養主義的志向」は、相応の相対的地位に置かれるべきであろう。

今回の調査結果から見る限り、専門教官を主とする教官全体の声は、コミュニケーション能力に結び付く総合的・実的な外国語能力の養成を求めており、上記の考察からも明らかなように、「読解力」もこの大きな枠組の中で広く捉えられ、従って専門書の読解力もその一環としてあくまでも相対的に認識されている。従来ややもすると、専門の教官たちは外国語教育に対してもっぱら原書購読に直結する読解力のみを要求していると考えられがちであったが、今回の調査でこれがいかに短絡的な断定、誤解に近い予断であることが明らかになったことは、今後の外国語教育をめぐる共同作業にとってこのうえない朗報と言えよう。何故なら、調査結果に現れた本学教官の外国語教育への全般的要望と言語センターの教育理念とは、ほとんどなんら隔たりのないものだからである。

注

- 1) 大学英語教育学会 CCR 共同研究グループ：全道大学英語教育の実態調査―道内 12 大学 4 年目学生アンケート調査を踏まえて―(北海道大学言語文化部紀要第 25 号，1994 年 2 月刊行予定)。
- 2) 例えば，大学英語教育学会 (JACET) 英語教育実態調査研究会：
 - 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』
 - (1) 一教員の立場―(昭和 58 年 3 月)
 - (2) 一学生の立場―(昭和 60 年 3 月)
 - 同上：
 - 『早期教育・中学校・高等学校の英語教育における実態と将来像の総合的研究』(昭和 63 年 3 月)
 - 同上：
 - 『職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』(平成 2 年 3 月)
 - 日本フランス語フランス文学会語学教育委員会：
 - 『第 4 回フランス語教育に関する調査―集計報告書』(1991 年)
- 3) [Q] は設問の略号。以下，調査表の特定箇所を指示する場合にはこの要領による。
- 4) 例えば：「外国の文化」「言語にとどまらず異文化理解が重要」「文化・実情」「異文化の素養」等。
- 5) 例えば：「3 年英語は困る」「商大の特徴としての外国語教育」「文学に偏り過ぎのテキストの在り方改善」「学年別ではなく学力別のクラス編成を」「ハングルを加える」「総合的語学力実現のため，態勢を整備」「専門との協働を」等。

- 6) 例えば：「一般教養」「理解力」「物の見方を発展させられる教育」「正しい日本語」等。
- 7) 大学英語教育学会（JACET）英語教育実態調査研究会：
『職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合研究』（平成2年3月）
- 8) ここには、英語のみを絶対視しない広い視野が感じられる。
- 9) 英語については、文字言語能力一辺倒の「受験英語」が念頭にあるせいか、1年目の目標ではまるでその反動のようにやや極端な音声言語能力重視の傾向（69%）が見られる（図8参照）が、2年目以降はバランスが回復される（図9、10参照）。英語以外の外国語については、両言語能力への期待は1年目から3年目まで全体としてはほぼ均衡している（図17～24参照）のがわかるが、ただし、1年目の目標の中で「読む」能力の占める割合が異常に高い（図17参照）のが目に付くが、これは、初習外国語に対しては、「1年目は文法、2年目から読本」という旧制高校以来の伝統につながる古色蒼然たる固定観念がいまだに幅をきかしていることと関連があろう。1年目の目標の選択肢に「文法」を加えておけば、もっと分かり易い結果が得られたにちがいない。